印度古典に顯はれたる醫方及び藥物について

泉　芳　環

予は佛教研究第二卷第四號（大正十年十月）に於て、印度の醫方及び藥物と題して大谷大學ヘルンレ文庫の醫方に關する印度古典を紹介した。當時、圖書の解說に思ひの外紙數を費したのと、多忙意に任せなかつたのとで、醫方及び藥物に就ての豫定を多少省略し、これを後日の起稿に讓つて一先づ筆を擱いたのであつた。今編輯委員から寄稿の囑により當時の缺漏を補ひ旁々この一編を草して責を塞ぐことゝする。

一

醫方藥物の原典としては其の種類も多いが、如何してもチャラカサンヒターとスシュルタサンヒターの二つを根本的のものとせねばならぬ。この原典の取扱ふ範圍も極めて廣きに亙つて居る。先づ醫方にしたところで、病理學あり、原因學あり、徵候論あり、豫後診斷あり、診斷法あり、治療法あり、飲食攝生法あり、身體療法に對する精神療法ありと云ふ有樣、又一方內科療法と相並んで外科療法あり、これには諸種の醫療器械も記載せられ、又解剖學の如きも頗る精に入り微を穿つてゐる。ヘルンレがその一部分である骨學を一九〇七年にオックスフォードで古代印度の藥物研究の第一編として公刊してゐることは已に叙べた。又產科學婦人に關する攝生法も相當に研究せられてゐる。一方に又藥物に就ては植物動物鑛物に亙り頗る詳細な記述あり、殊にその藥物の精煉法に至つては極めて重要な部分をなして居つて、素朴ではあるが相當の効果を收めたと首肯せらるゝ點に於てかの中世時代の煉金術などに比して全く選を異にしてゐる。これらに就て一々精密に觀察し叙述するが如きは到底この一小編の能ふ所ではない。故に今は單に稍特徵あるものに就て略說するに止める。

二

病理學、隨て生理學の根本となつて居るのは三要素（Tridosa）の原理である。卽ち人體はヴーユ（Vāyu）ピッタ（Pitta）カプハ（Kapha）の三要素から成つて居る。こ

れを今假りに序の如く『風』『膽』『痰』と譯する。この三要素は人體の各部分に行き亙り、而して適當に配合せられて居らねばならぬ。この三は人體の系統を保持する支柱である。これが適量であれば健康であり、若し其の孰れか一が按排宜しきを得ざる時は病を起し遂に死を招くのである。

月が露を結ばしめ日光を吸收し日光は地を乾かせ力を與へ風が彼方此方を動く如くに『痰』は濕潤を與へ『膽』はその熱によつてこれを乾かしめ、『風』は身體各部にこれを浮搖せしめて運ぶ。恁んな風のことが見えて居る。この原理は埃及やギリシアの僧徒の間に傳へられ、これに『血液』を加へて身體構成の四要素と見做され、永い間古代醫方の根本原理として幾多民族を支配したのである。

これら三要素は身體各部分に行き亙つては居るが然し『風』の主なる位置は足より臍『膽』は臍より心臟『痰』は心臟より頭部に至る部分に在るとなつて居る。又風は老年に膽は中年に痰は幼時に增盛である。又風は夕に膽は正午に痰は朝に增盛である。風は胃の食物が消化された後盛んに、膽は胃の食物が半ば消化された時盛んに痰は消化の始めに盛んである。風盛んなれば消化機能不整となり、膽盛んなれば增進し、痰盛んなれば弱められる。風盛んなれば腸祕結し膽盛なれば下痢し、痰盛んなれば適度である。三要素の平均狀態は健康體を保つが、時として孰れか一の缺減も可なることあり、其の場合には膽の多きは風の多きより優り、痰の如きは、風膽の孰れの多きよりも優る。

風は身體の運動を司り、接觸によつて激し易い。其の性は乾燥、輕捷、寒冷、銳敏、微細、動轉し易く、その官能に隨つて五種に分たる (1) Udāna 胸骨の上方頸部に位し、人の談話し唱歌し音聲を發するはこれに依る。若し缺損を來す時は頸骨の方の部分に於て疾患を生ずる。(2) Prāṇa 胸部に位し口鼻に通じ、呼吸作用及び嚥下作用をなさしめる。缺損する時は吃逆喘息等を起す。(3) Samāna 胃部にありて胃火に隣りす。消化管に運ばれた食物を滋養液に變じ、その液より體外に排泄せらるべき渣滓を分離せしめる。毀損せられた場合は消化不良、腹痛を起す。(4) Apāna は下腹部に位

し、兩便、精液、經水、胎兒を排出する官能を司る。毀損せらるゝ時は、便祕、直腸、尿道、膀胱及び生殖器の疾患を起す。(5) Vyāna は全身に行き亙り、液を諸部分に運ぶ作用をなす。發汗、出血、身體の各種の運動はこの機能に依る。若し調節を得ざれば身體の病氣を生ずる。

三

膽は其の性質溫にして、流動し、黃色、苦味、毀損せし場合は酸味を帶び、輕捷にして油狀をなす。動物體に熱を起すものにして五種あり。(1) Pacaka 胃と小腸の間に位置し、消化を司り、身體各部分へ熱を送り滋養液と排出物とを分離する。この消化熱に關して或ものはこれを體熱と同視し、或ものは異れりと見る。ラサプラディーパにはこの熱の本體を臍の中間に位する微細なる熱體であるとなし、一方膽に熱を與へ又胃中の食物を消化するとなす。大なる動物にありてもその大さ大麥の粒に過ぎない。小さき動物にては芥子粒程であり蟲類の如きにありては僅かに一毛の端に過ぎない。(2) Ranjaka 肝臟及び脾臟にあり、滋養液に赤紅色を與へ由て以てこれを血液となすものである。(3) Sādhaka 心臟にあり、記憶、智性、悟性を強む。(4) Alocaka 眼に位置して視力を保持する。(5) Bhrājaka 皮膚にありてこれに光澤と健康色を與へ、貼用藥を吸收して肌色を善くする。

痰は白色にして重く、油質にして粘着性ある、寒冷にして甘味の性質を有し、缺損せる場合には鹹味を有す。其の位置によつて次の五種に分たる。(1) Kledana 胃中にあり。食物を潤し、身體の諸機關を強くする。(2) Avalambana 心臟、肩關節、胸頸關節にあり。(3) Rasana 咽喉及び舌にありて濕潤性を帶ばしめ、食物の味を辨別せしむ。(5) Śleṣaṇa 關節にあり、それを滑かならしめ動作を便ならしめる。

四

これらの三要素が現今の醫學上果して幾何の價値あるものかは固より問題であらう。然し印度醫方に關しこれらの性質を知らずしては到底理解することが出來ぬ程に屢々用ひられる術語であり、何しろ病理の根本原理と見做されて居るのであるから繁を厭はずこれを

擧げたのである。

さてこの基礎の上に立ちて、或る一個人に對し、一定の徵候より推して三要素中の何が過多であるかを發見することは容易である。例へば生來『風』の過多なる人は一般に黑く、痩せて、乾燥し、髮少く寒冒に罹り易い。性質は多辯で嫉妬深く、短氣に、不眠の習慣あり、歩むこと早く、婦人をあまり好まず子は少い。此の人よく飛躍上昇を夢る。ヴーグブハタは狗、兎、駱駝、禿鷲、鼠、牝牛、梟の類は本來『風』質に屬すと云つて居る。

『膽』質の人は美にして痩せ、眼血走り、若くして白髮あり、臆病にして、怜悧に、激し易く、企業心に富み、氣位高く、情愛深く、自惚强く、親切であり。大食で、屢々飢え渴き、芳香、花、甘味、苦味、澁味ある冷かなる食物を好み、甘き酒精類を好む、記憶力ありて、火、電光等を夢る。虎、猿、猫、狼、蜘蛛はこの性質である。

痰質の人は美貌、長く黑き髮を有し、胸廣し、苦味澁味ある温き食物を好み。强健にして忍耐、食言せず禮儀正しく、敬虔にして、怜悧、されど仕事に遲鈍である。聲樂、器樂を好み、多淫にして、肉體的運動を好み、常に情事に關係し、常に河川、池沼を夢みる、鷲、白烏、獅子、馬、牡牛、は痰質に屬する。

風は斷食、徹夜、飛躍、過激な運動、過度の性交によつて過多となり、膽は、熱き乾燥せる、苦味の食物興奮性の飲料、憤怒、荒淫によつて過多となり、痰は睡眠不足、晝寢、食慾なきに食物を取ることによつて過多となる。

以上三要素の外に、身體を保持する七の重要なる部分がある。これを dhātu と呼んで居る。卽ち (1) Rasa (淋巴液) (2) Rakta (血液) (3) Māṃsa (肉) (4) Medas 脂肪質 (5) Asṭi (骨) (6) Majja (髓) (7) śukla (精液) である。

五

印度の藥物は現代研究者にとつて驚異の一である。その範圍も甚だ廣く動植物、鑛物に亙りて記載せられ且つその根本原理として五個の特性が擧げられる。卽

ち Rasa（味）Guṇa（性）Vīrya（力）Vipāka（果）Prabhāva（勢）である。

（一）味には六種、甘、酸、鹹、苦、辛、澁である。この中で第一が最も有効で第二、第三これに次ぐ。最初の三種甘、酸、鹹は風質に對して、次の三種は痰質に對して反能がある。澁と苦と甘とは膽質に對して鎭靜作用あり、鹹、酸、辛は膽の分泌を促進する。

（二）性は外用內服せられた場合に藥物の特殊の結果を起す內的特質と云ふべきものである。廣漠なる印度の邦土は六季の配合の其の宜に適ひ、實に植物の豐富なるそれ自身に一卷の百科全書を舒べたる觀がある。民族は古來諸種の藥草を檢査し攷覈して餘蘊なく、チヤラカは十種づゝから成る五十類の藥草の部門別を列擧して醫家の常用に資し、同時にこの類別は任意增加さるべきを附言して居る。同樣にスシュルタは三十七種づゝ七百六十類の藥草を共通の性能に隨つて列擧して居り、他の醫家亦これに若干を加へ印度藥物界は興味ある壯觀を呈して居る。加ふるに採集の時期、生長の程度、採集の場所、取扱保存の方法、性能の抽出法等を精密に考へて居る。

（三）力は藥物の研究上必須缺くべからざるものと見做される。太陽の影響、若くは月の影響によつて藥草の力は或は溫或は寒となる。その溫なるものは眩暈、渴、不安の念、發汗、炎症を起し、咳嗽『風』を止め『膽』を增し、消化作用を促進する。その寒なるものは『膽』を減じ『風』痰を增し、精力を進め愉快ならしめ血液を整へる。この點を注意せずに藥物を患者に與へては無効若くは有害の結果を招くのである。

（四）果とは內部熱のために藥物が人體機關に於て受ける變化である。藥物が胃中に入り消化せられ分解されて化學的變化を受けて全く他の形態を取る場合がある。この變化せられた狀態を果と云ふのである。前に出した六種味感の化學的變化は或は甘、或は鹹、或は辛である。この甘、酸、辛の三味は原則として變化しない。鹽質のものは甘、澁、苦質のものは辛となる。尤もこれには例外もある。例へば米は甘質であるが體內の熱によつて酸となり、訶梨勒の如きは澁味を有するも身體の化學作用のために甘となるが如くである。

（五）勢とは藥物の特殊な內在的作用である。卽ち味も、性も、力も、果も殆んど類似した藥物でありながらその用ひた結果が全く異る場合がある。

六

動物から取つた藥物には非常に澤山の種類がある。野羊の骨は燒いて粉末とし輭膏に作れば瘻を癒す。章魚の骨質の部分も藥用に使はれる。象の牙は白帶下の治療劑に用ひられ、蛇毒は水腫に用ひられ、蛇の一定期に剝脫する皮は殺蟲劑に、蜘蛛の網は血止藥に、床蟲を活きたるまゝ服用すれば間歇熱を治し、吐瀉せしめる場合は蠅を服用せしめる。頭髮を燒いて灰としたものは皮膚の疵に用ひられ、蛇を追ふためには頭髮を燒く。象の交尾期にその前額から分泌する液汁はマダ（mada）と云つて催春劑に用ひられ、麝香はヒステリー其他の神經的疾患に用ひられる。尿が非常に有効な藥物と見做されたことは特に興味を惹く。牝牛の尿は外用にも內服にも使はれて、疝痛其他の疾患を治す。野羊の尿は黃疸に、水牛の尿は痔疾に、象の尿は血液の疾患に用ひられる人の尿は咳嗽及び眼疾に、去勢した牡牛の尿は貧血及び赤痢に用ひられる。尿は必ず雌性のものを用ふることになつてゐる。然し馬及び象の場合は雄性のものが良い。人の爪は疵に用ひ、馬の蹄は熏蒸用とし間歇熱に用ひる。孔雀の羽は吃逆を治すと云ひ、又その羽から銅を抽出して指環を作りこれを所持すれば蛇毒に感じないと云ふ。魚類の膽は熱病或は眼疾に効あり、珊瑚は咳嗽に効あり、牛糞は皮膚の瘙癢に用ひ、時としては內服せしめる。印度では一般に牛糞を壁に塗り床に捺し消毒豫防の作用あるものとしてゐる。象の糞は癩病に家禽の糞は疝痛に、野羊の糞は皮膚病に効ありと信ぜられて居る。

七

鑛物質の藥物では金、銀、銅、錫、鉛、亞鉛、鐵等が用ひられる。然し鑛物藥の中では水銀が最も偉効ありとせられて居る。水銀は印度各地方に豐富に產出し已に古代より知られて居る。其の浮動性を有するよりこれを處理すること所謂「殺す」ことは相當の注意と忍耐とを要するので種々の器具が使用せられる。然し一たび處理せられた以上は如何なる難症、痼疾も能く癒

すことが出來ると云ふことである。この水銀の處理については種々の書物があり、種々の藥品を雜ぜて或は火熱或は蒸氣熱で氣長く製造するのである。

傳ふる所によれば印度の行者の中には百五十歲二百歲の高齡を保つものがある。これらは硫黃と水銀の混和した藥物を每月二回づゝ取ると云ふ。行者は呼吸の調節によりて健康を保ちその上にこれらの藥物の力を藉りて驚くべき長壽を保つのである。

八

釋尊の時代には印度の醫方藥物は相當の發達をして居つた。然し外科手術は動物の解剖が許されなかつた爲めに多少衰へたと云ふことである。とはいへかの有名なジーヴカ(耆婆)の如き釋尊の頭部の外科手術に見事な成果を收めたと云ふことが見えて居る。(東方聖書第十七卷一八二頁スペンスハーデーの佛敎論二四八頁對照)この外科手術に痲醉劑サンモーヒニー(Sammohini)と稱するものを用ひたことが見えて居る。この痲醉劑を用ふることは現代醫家にとつては格別珍らしいことでもない。然し手術後覺醒を促すためにサンジーヴニー(Sanjivani)と稱する藥物を用ひたことが見えて居る。これは現代醫家も恐らく使用してはゐないであらう。若しこれを用ひるならば知覺脫失のために死に致るの災厄を免れることであらうと思はれる。

尙ほ印度一般に知られた攝生法、婦人に關する衞生法に關しては他日端を改めて書くことゝする。

(一二、二、六)

二王尊のこと

高柳恒榮

一

吾々が步みをはこばせて古色蒼然たる梵伽藍に詣る時、先づ最初に目を驚かすものはその門の兩側で勇猛果敢なる相手を以て立つてゐる二力士であらう。これを吾々は通常呼んで二王尊といふ。それで今この二王尊に就いて述べて見たいと思ふ。一體この二王尊は仁王尊ともいふが此れは本名ではないと思ふ。是はVajrapāṇi(跋闍羅波膩)といふ梵語を譯して、金剛手、